鷗友学園女子中学校

２０１１年度

入学試験問題（３次）

【　国　　語　】

時間　５０分

【　注　　意　】

１．試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。

２．問題は全部で 15 ページあります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、監督の先生をよんでください。

３．問いに字数指定がある場合には、句読点なども 1 字分に数えること。

受験番号	氏　　名

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

美代子は、息子の光平が運動会を前に弱気になっているのを見て、自分の幼い頃の思い出を話すことを決意する。美代子が小学四年生の暮れ、同じ町内の北小から南小へ転校した時のことである。家族で小さな貸家に暮らすことになったが、同学年の大家の娘晶子に意地悪な態度をとられ、厭気がさしていた。次に続く部分は、美代子が五年生になり、晶子とクラスが別れた後の話である。

南小へ転校して初めての運動会。運動会は毎年、私にとっての晴れ舞台だった。

私は三組のリレー選手に選ばれた。晶子も一組の選手になり、共にアンカーを務め、競うことになった。しかも、学年の五クラスの間では一組と三組が二強と見られていた。

運動会本番の前々日、全体の予行演習を行う。勿論、リレーの練習も本番さながらに行われた。

「五年生女子のリレーに出場する選手の方は集合場所に集まってください」

放送委員がアナウンスする声が、ハウリングを起こすスピーカーから聞こえた。

集合場所で列に並んだとき、自分の薄汚れたみすぼらしいズックが気になり、すぐに裸足になった。それを晶子はめざとく見つけ「ふん、靴も買ってもらえない子がいる」と、鼻で笑った。

北小に通っていた頃、「ごめんね、美代子」と、毎年、母がすまなそうに謝る言葉に「ううん、全然平気だよ。それに新しい靴なんて履いたら、足にマメができるだけだもん。私ね、裸足の女王って言われてるんだから」と、①精一杯の嘘をついたことを思い出した。

「位置について、よーい」

パンッ。ピストルの音でリレーは始まった。走る距離は一人一周だ。練習といえども、各、クラスの大声援が校庭を埋め尽くす。

予想通り、一組と三組のマッチレースになった。一組が先頭で、アンカーの晶子にバトンが渡った。私は二番手でバトンを受け取り、前を行く晶子の背中を追った。私の身体はバネになったように地面を蹴り、半周付近で晶子を捕らえ、並んだ。人の顔

色を窺うほどの余裕はないのに、何故か、必死に顔を歪ませる晶子が分かった。と、晶子の身体が私の走路を邪魔するように入り込んできた。私は身体をひょいとねじ曲げ、それを難なくかわすと、晶子を抜き去った。

「おお」という歓声とどよめきが聞こえた。

そのまま一気にテープを切った。

その瞬間、背後でどさっと崩れてゆく影を感じた。

私は膝に両手を当て「はぁはぁ」と荒い息をつきながら、その方向を見ると、晶子が前のめりに倒れていた。その脇を後続のランナーが次々に抜き去る。晶子は半ベソをかきながら、よろよろと起き上がると、歩いたままゴールに入った。その顔を見ると、ラインを引いた石灰の粉が顔一面に付いていた。

「おい、見ろよ、あいつの顔。ありゃあ、おかめのお面だ」

ひとりの男子が、晶子を指差してそうからかうと、どっと笑いが起こった。子どもは残酷で思ったことを口にする。本来なら②憐れに思う場面なのかもしれないが、私の心の中にはっきりとした優越感が生まれていた。

その日、リレーのメンバー、朋ちゃん、日登美ちゃん、よっちゃんと一緒に帰った。

「晶子、ちょっといい気味だったと思わない？」日登美ちゃんが切り出す。

「あの顔、笑えた」朋ちゃんがすぐに反応した。

「私さぁ、幼稚園のとき、晶子にクレヨン全部折られてさぁ」日登美ちゃんが言う。

「私、トイレに閉じ込められたことがある」よっちゃんが怒る。

晶子から受けた仕打ちを仲間が口々に言い出すと、ほっとする思いがした。

……私だけじゃなかったんだ。

「だから、一組だけには負けたくないよね」

「うんうん」

さながら、被害者の会だ。皮肉なものだが、妙なことで四人の中に連帯感が生まれ結束した。

「あ、そういえば、カラスウリって本当に効くのかなぁ？」よっちゃんが真顔でみんなに話し掛けた。

カラスウリとは、小振りなタマゴ大の実のことで、秋になると雑木林などで木に巻きついた蔓に橙色の実をならせた。その実の中には、納豆のように粘り気のある種が詰まっていて、それをふくらはぎに塗ると足が速くなるという噂があった。何の根拠もない迷信の類いだが、当時、その町の子どもたちの間では、そう信じられていた。

「うちの兄ちゃんが、あれは絶対に効くって言ってた」

「えーっ、ホント？」

「うちのお姉ちゃんも言ってた」

「でも、あんなもの塗るのって気持ち悪いよね」

「そうだけどさぁ」

「あ、知ってる？　一番効くカラスウリって〈裏山〉にあるやつなんだって」

〈裏山〉と呼ばれる町外れの雑木林になる実は、幻のカラスウリと言われ、子どもでは手の届かない高いところになっている。

「だけど、あんな藪の中に穫りに行くの怖いよ」

私は男子に交じって、その〈裏山〉にカブトムシを捕りに行ったことがあった。日光の殆どが遮られた雑木林の中は、湿った風と草木の匂いに満ちていた。半袖から出た腕を蚊に食われ、棘のある木々の小枝で傷を作ろうとも、案外平気だった。蜘蛛の巣を掻き分け、時にアオダイショウに出くわしても驚きはしなかった。

「私が採ってきてあげようか？」

私が事も無げにそう言うと、みんな「えーっ、ホント。すごいっ」と、驚いた。

そんな他愛ない話をしながら「じゃあね、また明日」と、縦笛が差さったランドセルを背中でゴトゴトと弾ませながら、みんな家に帰っていった。

その晩、迷惑な訪問者が現れた。

「ごめんください」のひと言もなく、玄関の引き戸は開けられた。

キキキキッ。

その音に家族全員が驚きながら玄関へと視線を送る。そこには、晶子と晶子の母親が、既に入り込んでいた。

両親が立ち上がり、すぐに対応する。
「あ、村上さんの奥さん。何か？」
「何かじゃないわよっ。うちの子、おたくの美代ちゃんにケガさせられたのっ」
その怒鳴り声にもびっくりしたが、私がケガをさせたという身に覚えのないことに身体が硬直した。両親は振り返り、私を見た。
「今日、運動会の練習で、うちの子にわざと足を掛けて転ばせたっていうじゃないのっ。一体、どんな教育してるの、おたくはっ」
晶子を見ると、その膝には大袈裟な包帯が幾重にも巻かれていた。
「晶子の友達だと思ってたから、何かにつけ一緒に遊ばせてあげたのに、まぁこんなことされたんじゃたまんないわっ」
「美代子……」父が私を見つめた。
私はただ黙って身を縮めた。「違う」と、反論すれば③火に油を注ぐようなものだと感じたからだ。
「原田さんの紹介だったから、他の借り手を断ってまで貸してあげたのに、ホント、恩を仇で返すってこういうことよ。今度こんなことしたら出てってもらわなくちゃねっ」
晶子の母親は踵を返しながら、捨て台詞のように吐いた。
キキキキッ、ピシャ。
引き戸が閉まった後、しばらくの間、静寂に包まれた。家族みんな、唖然として声が出なかったのだろう。
最初に口を開いたのは兄で「何なんだ、あのおばさん」と、忌々しそうに言った。それに続くように姉が「ばっかじゃないの」と首を捻った。
「やめなさい」母がふたりをたしなめる。
父は「ふぅ」と、気を鎮めるように大きく息を吐き、私に向かって「そんなことしたのか？」と、改めて聞き直した。
「ううん、してない。晶子ちゃんは自分で転んだ。ホントだよ、みんな知ってる、ホントだって」私はそう言いながら、あふれてくる涙を手の甲で拭った。
私はてっきり叱られるものだと覚悟していたが、父は「そうか、もう分かったから……。泣くな」と、私の頭を撫でた。私は

ほっとした気持ちと、親が信じてくれたという想いに、声をあげて泣いた。
その夜、兄弟と並んで入った布団の中で、私は寝付かれなかった。リレーで晶子を負かせば、きっとまた難癖をつけられる。そうしたらうちの家族はここから追い出されるに違いない。あの晩の私の頭の中には、路頭に迷う一家の図が渦巻いていた。
私のせいで……。

運動会前日は準備だけで授業はなかった。
私たちは体育館から障害物競走に使う平均台や跳び箱を運んだりした。
校門には六年生が作った巨大な看板が取り付けられ、校庭の空には万国旗が張り巡らされた。
テントの下の本部席では、放送委員が徒競走のときに使うレコードをポータブルプレイヤーに載せ、確認をしている。威勢のいい曲『カルメン』が大音響で響いた。
着々と運動会の準備は進み、その様子に私は追い込まれていく気分になっていた。
遠目に見た晶子の膝には、これ見よがしに包帯が巻かれていた。それは周囲の同情を得るためと、私への無言の圧力なのだと感じた。
「はぁ……。どうしよう？」
見上げた空はどんよりと曇り、私の心を表しているようだった。このまま明日雨になり、運動会が中止になればいいのにと願った。
「美代ちゃん、明日頑張ろうね」
リレーのメンバーにそう声を掛けられても「あ、うん、そうだね」と、歯切れの悪い答え方しかできなかった。
「あ、そうだ、美代ちゃん、カラスウリは？」
「あ、そうだったね、ははは」私は笑って誤魔化した。カラスウリのことなどすっかり忘れていた。
……もしかすると、④私は仲間を裏切ってしまうかもしれない。そう思うと、まともに彼女たちの顔も見られなかった。
楽しい時間はあっという間に過ぎるが、厭なものが待っているときも時間の進みは早い。
コケコッコー。

近所で飼っている鶏の鳴く声が聞こえた。
当日の朝、早くから目覚めていたのに、私は布団から出ようとはしなかった。耳を澄ましても雨粒の落ちている気配もない。運動会は予定通り始まる。
気の早い大人たちは、場所取りをするためにゴザを抱え、校門の前に集まっているのかもしれない。当時、小学校の運動会は町の一大イベントでもあった。
初めての運動会を楽しみにしていた弟が、家の中をバタバタと走り回る足音がする。
「美代子、起きなさい」と、母が私を起こしにきた。
「母さん、私、おなか痛い」そんな嘘がとっさに口から出てしまった。
「いいから早く、支度しなさい」
母には、仮病だと分かっていたに違いない。
仕方なく布団から抜け出すと、枕元には真っ白な運動着と赤いハチマキがきちんと畳んで置いてあった。
着替えて、朝食の用意された卓袱台に着くと、両親と姉弟がみんな私を待っている様子だった。
私はひと言も喋らずうつむいていた。
と、父がゆっくりとした口調で「美代子、この間のことなら気にすることはないぞ」と、話し掛けてきた。
「うん？」
私は目を擦りながら、父親の言う意味を理解しようとした。
「この家のことなら、何も心配することはない。父さんは、自分の子が侮辱されてまで他人に媚びへつらうのはイヤだ。父さんは無学だけど、そういうことは分かる。貧乏人だからって恥じる気もない。出て行けって言うなら出ればいい。それだけだ。だから、お前は何も気にせず思いっきり走れ」父は目を細めて穏やかな笑顔で言った。
「父さん……」
「それから、これ」
父は卓袱台の下から紙袋を取り出すと私に渡した。
「うん？」

「開けてみろ」
私は急いで袋を開けた。そこには真っ白なズックがあった。
「安もんでごめんね」と、母が謝った。
私は大きく頭を振った。
横からのぞく弟が「いいなぁ、僕のは？」と、訊く。
「お前は、今日、一等賞になったら」姉がふざけてからかう。
「ちぇー」と、不満を漏らす弟を父は自分の膝の上に乗せた。
「美代子は、とにかく頑張れ」父はそう言って何度も頷いた。
「ありがとう……」それ以上は言葉にならなかった。同時に、仮病まで使って逃げてしまおうと考えた自分が恥ずかしくなった。
と、キキキキッと音を立て玄関が開いた。兄が息を切らしながら勢いよく駆け込んできた。
「おお、間に合ったか。美代子、ほら、幻のカラスウリだ」
兄の手のひらには橙色の実がたくさん載っていた。〈裏山〉まで自転車を飛ばし、採りに行ってくれたのだった。
「兄ちゃん、僕には？」弟が兄に駆け寄る。
「ああ、お前の分もある」
「やったぁ」弟がはしゃぐ。
「美代子、いいか。これ塗って、絶対負けんなよ。負けたらぶっとばすからな」
荒っぽい言い方だが、触れた兄の手は温かかった。
「兄ちゃん、ありがとう」涙が止まらなくなった。

「……」
光平に語り掛けていた昔話に、⑤目頭が熱くなり、気づくと私は言葉を失くし、しばらく黙り込んでいた。
ザブーン。
お湯のあふれ出る音がすると、風呂場のドアが少し開いた。息子はその隙間から半分顔を覗かせて「で、結局どうなったんだ

よ、その後？」と、訊いてきた。
「うん？」私は慌ててはなをすすった。
「だから、お母さんはその厭なやつに勝ったのかってこと」
私はひと呼吸置いて「当たり前でしょう。家族みんなの想いが追い風になってるのよ。負けるわけないじゃない。もう、ぶっちぎりよ、ふふふ」と、笑って返した。
一着でゴールした私は大歓声に包まれた。メンバーと肩を抱き合い喜びながら、目は両親の姿を探した。家族が私に手を振っているのが分かった。
「へー、やるじゃん。で、そいつ、へコんだ？」
お伽話なら、万事めでたしめでたしというところなのだろうが、その程度のことで晶子のねじ曲がった性格が直るはずもない。その後も相変わらずの〈晶子ぶり〉を発揮し、私にもちょっかいを出してきたが、受け止める私の方に余裕があった。どうでもいい存在になっていた。
「何事も気持ちの持ち様よ。だから、あんたもやめるとかやめないとかグダグダ言ってないで、ガツンとぶっちぎっちゃいなさいよ」
もしあのとき逃げていたら、私は一体どんな私になっていただろう？
「お母さん、光平がやる気になるなら、何でもしてあげる」
「うーん、じゃあ、とりあえず新しいシューズ買ってくれる？」
「まっ、ホント現金なんだから。いいわよ、買ってあげる。ナイキでもアディダスでも、好きなものをね」
「うへへ。やったぜ」
「でもね、ひとつ言っておくけど、その靴は逃げ足に履かせるための靴じゃないからね」
「うん。分かってるって」
「お父さん(注)の分まで見届けてあげるから、しっかりね。ホント、頼むわよ」
「あ、そうだ、ビデオ撮るとき、あんまり出しゃばるなよな、恥ずかしいし」
「何が恥ずかしいのよ、親が息子を応援するのに。そんなこと言ってたら最前列で〈行けーっ、光平っ〉て叫んでやるから」

「ひえー、ウザい」
「ウザいって、こらっ」
私は立ち上がり、手にしたバスタオルを投げつける真似をした。
「おっと」
息子は慌ててドアを閉め、浴室に大声を響かせて笑った。
「残念でした、ははは」
「こらっ」
少しは分かってもらえたのかしら……？
脱衣所から出ようとすると「お母さん」と、呼び止められた。
「はい？」
「オレさぁ……」
「何？」
「オレ……オレさ、ぶっちぎってみせるからさ」
一度冷めかけた⑥目頭がまた熱くなった。目を閉じて上を向くと、雲ひとつなく晴れ渡った十月の青空にたなびく万国旗が見え、そのはためく音までしっかりと聞こえてきた。

（森浩美『こちらの事情』より「晴天の万国旗」）

（注） お父さん……父はアメリカに単身赴任中である。

問一　――線部①「精一杯の嘘をついたこと」とありますが、これはどのようなことですか。「私」の家庭の状きょうをふくめて説明しなさい。

問二　――線部②「私の心の中にはっきりとした優越感が生まれていた」とありますが、なぜこのような気持ちになったのですか。これまでの「私」の「晶子」に対する気持ちをふくめて説明しなさい。

問三　――線部③「火に油を注ぐようなものだ」とありますが、これはこの場面ではどのようなことですか。具体的に説明しなさい。

問四　――線部④「私は仲間を裏切ってしまうかもしれない」とありますが、「仲間を裏切ってしまう」とは、「私」がどのようにすることですか。そのようにする理由もふくめて説明しなさい。

問五　――線部⑤「目頭が熱くなり」、――線部⑥「目頭がまた熱くなった」とありますが、「目頭が熱く」なったのはなぜですか。「私」の気持ちをふくめて、それぞれ説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一〇年間ほど日本大学の芸術学部で教えていた。毎年、学生に遊具の設計課題を出した。この課題は共同製作で、四、五人の学生が一グループを形成し、遊具をデザインするのであるが、実際にその遊具の製作まで行なう。

学校から製作費を出してもらい、その範囲でさまざまな材料を集め、加工し、組み立てる。それを幼稚園に運んで、子どもたちの反応を記録し、調査する。

このプログラムのおもしろさは、議論をし、スケッチを出し合いながら、アイデアをまとめていく共同製作のむずかしさを体験し、見積もり、製作という実現過程を学び、かつ利用者の厳しい評価を受けるという点である。

毎年、四、五グループで、それぞれ一つの遊具を三カ月ぐらいのうちに完成させる。学生たちは普通のデザイン課題とは異なるプログラムなので最初は戸惑うが、かなり夢中になって製作してくれた。

幼稚園にもっていくと、遊具の評価が明確になってしまう。形としていかにも大変おもしろいものや、アートとしていけるものも、利用者である子どもたちの辛い評価を受けて全く人気がないということがある。人気のある遊具を開発したグループは得意げであるが、全く見向きもされない遊具のグループはガックリとくる。

毎年、さまざまな反省や議論がなされていく中で、子どもにとってあそびやすい遊具とそうでない遊具の違いが明らかになってきた。

子どもたちが〇〇ごっこのようなゲームをするあそびやすい遊具には、子どもがかけまわるコースがある。それには必ず、私がめまい体験の場と呼んでいる、暗い穴やすべれるところ、ゆれるところ、やわらかい床などがとりつけてある。全体にこうした遊具では子どもの行動の軌跡が一様でなく、さまざまなところから、入り込め、もぐりこむことができる。特に、近道ができる。シンボリックな形態や場もあった。

①これがきっかけで、子どもたちがあそびやすい広場、建築、公園、町とはどういう構造をしているのかと考え、いくつかの調査を行なった。そうすると、スケールや空間の質は違うけれども、広場でも建築でも都市でも、子どもたちがあそびやすい空間は、上述のようなあそびやすい遊具と共通した構造をもっていることを発見した。私はそれを遊環構造と名づけた。その構造

についてもう少し考えてみよう。

「ポーラス」という意味は、「穴が開いている」ということである。身体が入るくらいの穴があいていると子どもたちは必ずもぐり込む。小さな指が入るくらいの穴は指を入れて広げる。もう少し大きな穴があると腕まで入れる、のぞく、顔をつっこむ。穴というのは子どもたちにとって、大人とはちがう別の意味があるのかもしれない。洞窟、押入れは穴の一種だし、そこでのあそびはなんとなく秘密めいて楽しい。たくさんの穴があいている壁が林立しているだけで、子どもたちはゲームをはじめる。隠れる、逃げる、追いかける。穴には子どもたちのこのような行動を引き起こす作用があるのかもしれない。子どもの年齢と穴の大きさの関係が、そこでの子どもの行動を決める。例えば幼稚園の年長組では、一・二メートルの穴は四、五人の子どもたちがかたまってあそぶにはちょうどよい大きさだし、六〇センチの穴はもぐり込んだりすべったりするのに好ましい。たとえ四五センチの穴でも、もう少し大きな子どもでも十分に行き来することができる。

ポーラスな空間のもう一つの意味は、自由に出入りできるということである。例えば公園の出入口が一カ所でなく、いろいろなところから出入りできる、広場がフェンスに囲まれて出入口が一ヶ所というのではなく、たくさん穴があいていてどこからでも入り込め、もぐり込めるということである。子どものための建物であっても同じことがいえる。例えば幼稚園のプレールームで出入口が一カ所の場合と、いろいろな場所から入り込める、もぐり込めるという形態のものでは、子どもたちの行動は大きく異なる。たくさんの穴がある方が、確実に子どもたちの動きは活発になる。子どもたちを固い壁で閉じこめておくのではなく、穴のたくさんあいた壁で囲み、その内側の空間と外側の空間とが行き来できる方がよいと考えている。そうすることによって、壁がもう一つのあそび場になるようだ。

子どもたちの穴に対する認識と行動を、私たちのつくる建築や町の作り方に反映したいものだ。

一九七五年と八一年の二回、函館で行なった子どものあそび環境調査は印象深い。私は全国三九地区であそび環境の調査をしたが、函館では四つの小学校で行なった。函館の人口密度はかなり高いのに、子どもたちは他の都市と比べてあそび空間を二倍ちかくももっていた。しかも子どもたちのあそびが活発であった。一つには函館が碁盤目状の町で、道幅が広くしかも車が少ないことが理由であろう。北海道では積雪が多いため、住宅地の家々のまわりに塀が少なく、子どもたちがどこにでも入り込め、駆

けまわれるようになっていた。坂道も適所にあって変化に富んでいる。この町の構造が子どもたちのあそびを活発にしているのではないかと思った。

全国各地での調査の中で、町全体をあそび場にしていた子どもの頃の思い出を採集していると、「町全体を使って、夕方、黒い服装で皆ドロジュン(注)になりきる。逃げる側になると忍び足で、右をみて左をみて、ぴったりはりついて道なき道を行ったりした」「車の入ってこない路地があってそこでかけっこをした。運動会のリレーの練習をした」というような楽しい思い出がたくさんある。それらの町の特徴は、車が少ない、道幅はあまり広くない、電信柱、階段、木、塀や柵等あそびの拠点になるシンボルがある、家並の間に小さな路地やすき間がある、そして所々に小さな広場や大きな広場があるといったような変化に富んでいる、しかも一ブロックを一回りできる、などといったことである。

道も坂道があったり、舗装された所、土のままの所、曲がりくねっている所、まっすぐの所といろいろあって、池があったり、小川や水たまり、湧き水があったりするともっと楽しくなる。このように子どもたちが自然に集まってゲームができるような町は、子どもたちがあそびやすい遊具と同じような遊環構造をもった町だということができる。それを整理してみると次のよう七つの条件になる。

1 循環機能があること
2 その循環（道）が、安全で変化に富んでいること
3 その中にシンボル性の高い空間、場があること
4 その循環に「めまい」を体験できる部分があること
5 近道（ショートサーキット）ができること
6 循環した大きな広場、小さな広場等がとりついていること
7 全体が②ポーラスな空間で構成されていること

私は、このような構造をもつような子どものあそび環境づくりを心がけている。

（仙田満『子どもとあそび―環境建築家の眼―』）

（注）ドロジュン……おにごっこの一種。どろぼうチームとじゅん査（警官）チームにわかれて行う。

問一　――線部①「これがきっかけで ～ いくつかの調査を行なった」とありますが、このような調査をするまでの流れを、「学生たちが遊具を共同製作し、」のあとに続けて、八十字以内で説明しなさい。

問二　――線部②「ポーラスな空間」があると、子どもたちの行動はどのようになると筆者は考えていますか。「ポーラスな空間」とはどのようなものかを明らかにして、八十字以内でまとめなさい。

三

次の各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 合格へむけてフンキする。

(2) カンセイとうから指示する。

(3) 書類をフクシャする。

(4) 事業にサンカクする。

(5) カイキ祝いを行う。

二〇一一年度　鷗友学園女子中学校

入学試験三次　国語　解答用紙

受験番号
氏　　名
得　　点

一

問一

問二

問三

問四

問五

二

問一　学生たちが遊具を共同製作し、

問二

三

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

①　②　③　④　⑤　⑥　⑦　⑧

このらんには何も書かないこと